● オリンピック特別委員会

オリンピック特別委員会

派遣手続き　→　講習　→　記者発表　→　ＪＳＡＦ壮行会

６月１８日の夜に北区にあるＮＴＣに集合し、１９日は朝から北京五輪の派遣手続きを行い、盛りだくさんの準備講習を行いました。派遣手続きは書類のチェックと採寸、選手は健康診断がありました。個々に診療が必要だった選手、トレーニング、ｾｰﾘﾝｸﾞﾁｰﾑへのスポンサー支給品を配布したり作業が続き、夕食後からルールと潮のﾀｸﾃｨｶﾙな部分の話を青山さんと大谷さん、英語のチェックは青山夫人にお願いしました。

青山夫妻には強化合宿をＪＩＳＳでやるようになってから、今年で３年目になり、ノーなのにイエスといってしまわないように徹底的にしこんでもらってきました。その成果が五輪ﾁｰﾑには表れはじめ、選手が英語でまくしたてられても、まったくビビルことなく対応できる姿に青山夫妻もうれしそうでした。

また、大谷さんからプロテストの際にモデルを置くのをジュリーがよく見ているという話があり、実際にグループ分けして、審問のモデルの置き方と英語での説明を練習しました。失敗例がいくつかでる中で、みんな覚えることも多く、貴重な３０分間でした。「ぶつかった瞬間からさかのぼってモデルを置く。艇速と移動する距離のつじつまが合う。事実をまげない。」という注意は、本番でいかしてください。

大谷さんは潮と艇速とレイラインの関係を座標を用いて説明。分度器と方眼紙を配って、選手が自分の艇種で潮の向き、風の向き、風速を考えてレイラインを作成し、レース本番のときに頭で描けるようにと指導してくださいました。ここで数字に悩んでいたのがコン・カマの二人。でも、形を覚えてしまえば使えると割り切って淡々としているあいちゃんに、理論の上を行く何かを感じてしまいました。

翌朝は、フィードバック、本番の段取りの説明、栄養補給と中国の食の注意、ドーピングに関する諸注意、ＡＤＡＭＳの期間、東大・大学院の早稲田先生に青島の潮流についての説明、予報士の岡本治朗さんに青島の風についての説明をお願いしました。なにしろ、持ち時間が突然少なくなっていき、あわただしいものでしたが、選手はﾁｰﾑとしての連帯感をもち始め、本番への準備が地に足をつけてのものとなりだしました。

１５時からは記者発表を行い、１７時にはＪＳＡＦ壮行会の開かれた有楽町を目指して移動をしました。本当はもう１日余計に合宿して、余裕をもって講習をしたかったところですが、石橋・牧野組は引き続きｷｰﾙｳｨｰｸへ参戦のため、次の日には成田から出発でした。４７０男子ﾁｰﾑはﾖｰﾛｯﾊﾟ選手権の後、現地でコンテナの積み込みがあったため、帰国の際に成田からＮＴＣへ直行。近藤・鎌田はトレーニングパートナーの原田・吉田がﾖｰﾛｯﾊﾟで艇を移動させておき、二人はｲﾀﾘｱから帰国して、今度はハンブルグへ行くという強行スケジュールでした。そんなに無理して大会にいかなくても・・・という話も聞きましたが、結局、海外へ出たほうが落ち着いて練習できるし、試合で集中できるという現実が、機内でぐっすり休んで移動するコン・カマの強さになっているのでしょう。

次は青島現地合宿です。いよいよ、本番モードになってきます。